

トルコの加盟交渉—東西の架け橋となるか

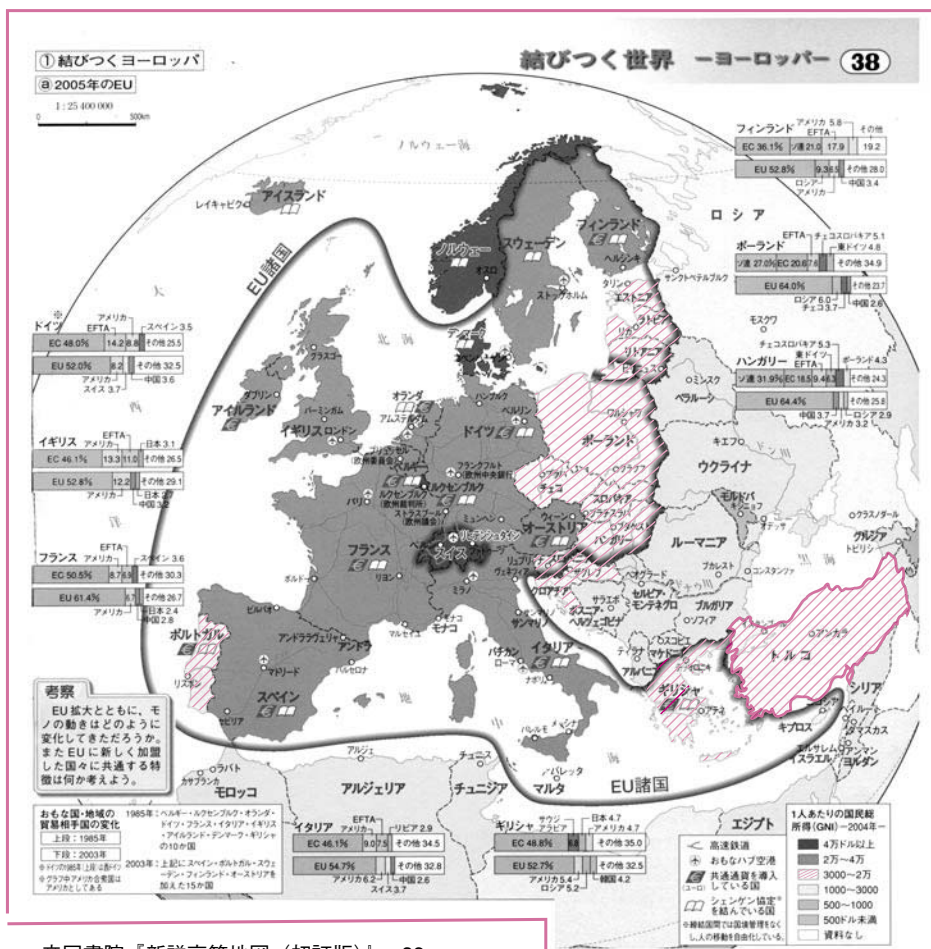
一橋大学大学院社会学研究科教授 内藤 正典

トルコのEU加盟交渉開始まで

2004年12月、ブリュッセルで開かれたEU首脳会議（欧州理事会）は、翌05年10月から、トルコとの正式加盟交渉を開始することで合意した。トルコがEUの前身、EEC（欧州経済共同体）に加盟申請をしたのが1959年だから、およそ半世紀をへて、ようやくヨーロッパの一員としての地位に現実味が帯びてきたことになる。1987年には加盟申請が拒否され、99年にようやく加盟交渉の候補国となり、2002年にはコペンハーゲン基準（人権擁護、法治国家の整備、市場の整備などの条件）を

満たせば、加盟交渉に入ることが合意された。過去5年のあいだに、トルコは、マイノリティ（特にクルド人）の人権、基本的人権の尊重、死刑制度の廃止、インフレの抑制などの面で大きく前進し、05年の正式加盟交渉開始にこぎつけた。

しかし、トルコの前途は明るくない。04年の首脳会議前後から、加盟国の市民から、強い反対論がでるようになった。04年に旧社会主義圏の東欧諸国が新たに10か国加盟したことで、コアメンバーの先進国、特に、ドイツ、フランス、オランダなどに、これ以上の拡大が損害をもたらすという意識を広めた。05年に、EU憲法条約が、フラン



帝国書院『新詳高等地図（初訂版）』p.38

スとオランダでの国民投票で否決されたのも、負担の増大に対する嫌気と、拡大によってヨーロッパ市民としてのアイデンティティが薄れることへの嫌悪が原因であった。

「トルコとは、文化的・宗教的基盤が異なる」「ヨーロッパ人と精神的基盤を共有しない」など、一見すると本質的相違に関わる批判も噴出している。だが、人口の99%近くをイスラーム教徒が占めることで排除するなら、最初から、言うべきであった。それに、EUは「キリスト教諸国の連合」と自己定義したことはなく、文化的多様性の上に立脚する組織である。問題なのは、このような文化的違和感が、現在、EU拡大を阻止するための理由に使われている点にある。

イスラーム国でないトルコ

そもそも、EU創設の理念は、二度の世界大戦にドイツが関わってヨーロッパを戦場にした歴史を繰り返さないため、旧敵国だったドイツ（当時は西ドイツ）を内側に取り込んで協調体制を構築することにあった。1952年に欧州石炭鉄鋼共同体（ECSC）を創設し、戦略物資だった石炭や鉄鋼の資源配分を調整したのもそのためである。冷戦後、社会主義諸国という「旧敵」を取り込んで東方拡大を進めたのも同じ理念にたつ。もし、危険な国を取り込んで協調体制を築くという理念にしたがえば、今日の世界で最大の脅威であるイスラーム主義の暴力（テロや暴動など）と立ち向かううえで、トルコを取り込むことは理にかなっている。トルコは、ムスリムの国ではあるが、イスラーム国ではない。この点は地理教育でも、厳密にしなければならないのだが、イスラーム教国というのは、国家の法体系や諸制度がイスラーム法に準拠する場合をいう。トルコは、イスラーム世界にあって、唯一、厳格な政教分離をとり、憲法で世俗国家（公的領域は非宗教的でなくてはならない）を宣言している。1923年の建国以来、西欧化＝近代化という路線をとり、EUへの加盟を望んできたのである。

いま、トルコを疎外するならば、中東・イスラ

ーム世界諸国の民主化と安全保障には重大な危機となるだろう。トルコ国内には、EU諸国の側から文化的違和感が表明されたことに対して強く反発する人が増え、それなら、西欧化などやめて、イスラーム主義や民族主義の方向に行こうとする意見が強まっている。イラクやイランと国境を接するトルコが、従来のように西欧的な諸制度にもとづいて民主化と人権の確立をめざす方向に背を向けてしまったら、中東地域の安定はむずかしくなる。

東西の架け橋(クルド人とイスラーム主義者)

隣国イラクの再建は困難である。そのなかで、北部のクルド人は独立色を強めている。独自の国家をもたないクルドにとって、イラクの混乱した現状は、自分たちの独立を実現するうえで、むしろ望ましいかもしれない。その影響は、トルコ、イラン、シリアなど、国内にマイノリティとしてのクルドが居住する地域に波及する。しかし、近隣諸国は国内のクルドが分離独立の動きをみせることを極度に警戒しているので、彼らに対して厳しい姿勢をとることになる。

だからこそ、トルコのEU加盟を実現させる意義がある。加盟交渉が継続しているかぎり、軍部は、クルドに対して強硬な姿勢をとることはできない。EUが定める人権尊重と民主的法治国家の実現は絶対の条件である。一方、クルド側も暴力的な異議申し立てはできなくなる。同じことは、イスラーム主義者にもあてはまる。彼らも、宗教色のない法体系にイスラーム法を導入しようとしているが、これも、EUの法体系と合わないのでむずかしい。つまり、トルコがイスラーム世界の国として初めてEUに入ることができれば、それは、単にヨーロッパの一員となるということではなく、法の支配、マイノリティの人権拡大、民主化などの面でイスラーム世界との協調体制を築く第一歩となるのである。東西をつなぐ架け橋というのは、このような改革を実現することを意味するのである。